

発表4 DLAで分かるつまづく子どもの実態 櫻井千穂（同志社大学）

概要

CLD 児の支援にあたる教育現場の教員や支援者にとって、目の前の子どもの言語発達・言語習得が順調であるか、また、そうではないように感じられた時、その要因が何であるかといった問いは極めて重要となる。DLA（Dialogic Language Assessment）は、発達水準を数値で示す既存の標準化検査のように確立されたものではなく、上記の問いに答えることを目的に開発されたツールではない。しかしながら、DLA は子どもに応じた課題や支援を与え、その支援を得ることができることも評価対象とするといったダイナミック・アセスメントとしての側面をもつ。この点を十分に活かすことにより、CLD 児の言語能力を、個人の特性や環境も含め、多角的且つ包括的に診断することができ、その後の支援に役立てることが可能となる。

以上を踏まえ、以下の7つの事例について DLA の音声及び文字化データの一部を共有しつつ、「DLA で何がわかり、どう支援につなげるか」といった点を考察した。

事例1：9歳、入国年齢5歳、滞日期間4年、ロシア語母語（日常会話レベル）児童。小学1年生相応のテキストレベルを読んで、あらすじの口頭再生を一人でおこなうことは難しかったが、支援を受けて大まかなあらすじを最初から最後まで話すことができた過程の評価から、教科学習につながる読書力の支援方法のヒントが得られたケース。

事例2：9歳、入国年齢8歳、滞日6ヶ月、中国語母語（年齢相応以上）の児童。基礎語彙や文法、文の生成の力はまだ不十分であったにもかかわらず、「環境問題」の概念説明や意見（対策）表出といった認知負荷の高いタスクに挑戦した事例。日本語力と認知力に大きな差が見られたケースだが、母語で培ってきた力を生かすことで、予測通り、その後の日本語の習得もはやく進み、滞日1年半でほぼ年齢相応のテキストを読んで理解できるレベルになったケース。

事例3：7歳、日本生まれ、中国語母語の児童。小学1年生の時点では、二言語ともにリミテッド状況が心配されたが、家庭での母語の学習と学校での日本語支援と母語の価値づけにより、小学5年生の時点では二言語ともにほぼ年齢相応のレベルにまで伸びたケース。

事例4：8歳、日本生まれ、5～6歳の時期に8か月帰国、スペイン語母語の児童。日常レベルの会話においても意思疎通がはかれず、心配されたが、保護者と担当教員との連携により、それぞれが強い言語での語りかけを行った結果、7か月後には、語彙、文法面での課題は残るものの、二言語での意思疎通が可能となったケース。

事例5：9歳、入国年齢4歳、滞日期間5年、スペイン語母語児童。週4日、1日4時間ずつの日本語指導が行われていたが、二言語ともに日常会話レベルのやりとりにも課題が見られた児童のケース。保護者は日本語習得が十分進んでいないことに気づいておらず、この時点までに適切な介入がはたせていなかった。支援内容の大幅な見直しを必要としたケース。

事例6：11歳、入国年齢6歳11ヶ月、滞日期間4年3ヶ月、スペイン語母語児童。二言語ともに話す力と読む力に大きな差が見られた事例。読む学習を小学1年の時から二言語で続けていたにもかかわらず、日本語は1年生前半レベルのテキストの拾い読み、スペイン語もスペリングの読みに課題が見られる段階であった。この後、専門機関での診断につながったケース。

事例7：12歳、入国年齢11歳、滞日期間5ヶ月、スペイン語母語児童。入国時に母語であるスペイン語力に課題が見られた児童のケース。児童にとって第二言語となる日本語での教育環境の中で、母語力を含めた認知的発達を促すことを目的とした支援に取り組んだケース。

ディスカッションの内容のまとめ

DLA 実施中の有効な支援のあり方、また、実施後にどのような指導・支援を行うか、どのよ

うに連携するかといった点からの話し合いが行われた。DLA 実施中の支援については、子どもの発達段階や言語の習得レベルに応じた発問の調整の重要性が再確認され、教師教育への応用にも言及された。実施後の指導・支援及び連携については、DLA の録画・音声データを支援に携わる者（担任、日本語担当教員、管理職、支援者、母語話者支援者、教育委員会、学識経験者等）や保護者間で共有し、話し合いの場を持つことの有益性について、実践を交えた報告があった。また、教科学習につながる支援として、取り出しと在籍学級との連携を重視した予習型支援、読み書きの力を育てるための継続的支援、言語ポートフォリオの活用などの提案があった。DLA を日本語の初期指導の修了判定に活用しているという報告もあったが、DLA は支援を検討するための診断的アセスメントであるという性格上、修了判定にはそぐわないのではないかという指摘があった。最後に CLD 児の言語能力アセスメントには、日本語だけでなく、複数言語を診る視点が必要であるという点が共有された。

参考文献・参考ウェブサイト

- Cummins, J. (1979). Linguistic interdependence and the educational development of bilingual children. *Review of Educational Research*. 49, 222-251.
- Cummins, J. (2009). Fundamental psychological and sociological principles underlying educational success for linguistic minority students. In T. Skutnabb-Kangas, R. Phillipson, A. K. Mohanty, & M. Panda (eds.), *Social justice through multilingual education*. Bristol: Multilingual Matters. 19-35
- Haywood, H. Carl & Lidz, Carol, S.(2007) *Dynamic Assessment in Practice Clinical and Educational Applications*. Cambridge University Press.
- Lynette Austin. (2016). *Dynamic Assessment with ELLs: A Step-by-Step Tutorial*. Attendee Questions Remaining Unanswered during the Live Webinar on 10-7-2016
- ヴィゴツキー レフ著、柴田義松訳 (1962/2001) 『新訳版・思考と言語』新読書社
- カナダ日本語教育振興会 (2000)『子どもの会話力の見方と評価—バイリンガル会話テスト(OBC)の開発』(URL: <http://www.cajle.info/publications/other-publications/>)
- カミンズ ジム著、中島和子訳著 (2011) 『言語マイノリティを支える教育』慶応義塾大学出版会
- 櫻井千穂 (2008) 「外国人児童の学びを促す在籍学級のあり方—母語力と日本語力の伸長を目指して」『母語・継承語・バイリンガル教育 (MHB) 研究』 4号 pp.1-26.
- 櫻井千穂・孫成志・真嶋潤子 (2012) 「日本生まれの中国ルーツの児童に対する二つの言語能力評価と言語教育の重要性—児童Kの二言語能力の変化に着目して」『21世紀の世界日本語教育・日本語研究—中日両国国交正常化40周年記念論文集』高等教育出版社 pp.188-197
- 櫻井千穂(2016) 「スペイン語母語児童生徒の二言語能力の関係—物語文の聴解・再生課題の分析を通して—」『日本語・日本文化研究』26号、大阪大学, pp.42-61
- 中島和子 (2007) 『外国語習得と母語との関係—セミリンガル現象の要因と教育的処置に関する基礎的研究報告書』平成15年度～平成18年度科学研究費補助金基盤研究(B)
- 中島和子・櫻井千穂 (2012) 『対話型読書力評価』平成21～平成23年度科学研究費補助金基盤研究(B)
- 文部科学省 (2014) 『外国人児童生徒のためのJSL対話型アセスメントDLA (Dialogic Language Assessment)』(URL: http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/clarinet/003/1345413.htm)
- 真嶋潤子・櫻井千穂・孫成志 (2013) 「日本で育つCLD児における二言語とアイデンティティの発達—中国語母語話者児童K児の横断研究より—」『日本語・日本文化研究』第23号 大阪大学 pp.16-37
- 前川久男・梅永雄二・中山健 (2013) 『発達障害の理解と支援のためのアセスメント』日本文化科学社

以上